

これはゾンビですか？～はい、ですがこのゾンビは一般のゾンビと
は一味違います～

憑藻大御神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生した主人公が相川歩に憑依して相川歩としての物語をいく

そんなありふれたお話です

二次創作でありながら原作とほぼ同じ文面ご了承下さい

一応主人公は歩と同じ性格がではないので「本文原作と一緒にじゃないか!!」と思わず暖かい目で見てください

苦手な方はバックアップ推奨

豆腐メンタルなんでできるだけ悪口はやめてください。胃にきまず

目次

「まあ当たり前障りの無い会話をお楽しみください。ああ、あと俺今めっちゃ死にそうっす」	1
「親方あー！空から女の子が降ってきました！」「だあああらっしああああ!!」	3
『歩 だれ?』「あたしは天才美少女悪魔男爵ハルナちゃんだ!」	14

「まあ当たり前障りの無い会話をお楽しみください。あ、あと俺今めっちゃ死にそうっす」

俺がこの高校に入って、初めて夏がやってきた。「いつからが夏だ？」などという論争が毎年あるのだが、そんなことはどうでもいい。「暑いなら夏」それでいいじゃないか。

梅雨というじめじめした雨雲がすぎた快晴の空を見上げて、俺は人生にとつてとてもためになる教師の言葉を聞き流し、授業の退屈さを文字どおり噛みしめていた。

ああ、退屈だ。超がつくほど退屈だ。俺はアイツとは違いとてもじゃないが刺激というスパイスがほしい。

だらりと机の上にもるでスライムみたいに倒れ込む。今は数学の授業中なのだが、そんなもん知ったこっちゃない。仕方がないなだろ？俺はあるいみ日に弱いんだから。

窓際はとても嫌だ。普通の人から見ればそこは特等席かもしれない。日にあたり、窓の外のブルマという至高の服を纏った体を動かし汗をたらしながら運動している女子の姿を見る。幸福だろう汗で服が肌にくっつき、若く瑞々しいはだを特等席で見れるのだ。一般の生徒から見ればとても羨ましく思われるだろう。しかも俺の席は窓際の後ろから二番目という好ポジションだ。先生に当てられる可能性も少なく寝てしまっても気をつけていればばれることはなくとても良い席だろう「席を替えてくれないか」といえば喜んで替えてくれるだろう。

全くせつかくの睡眠を時間に水を差……日差しやがって。

夜間学校ならばこんなには困らないだろう。

え？暑いのかって？

いや違う、ただ単純に日差しが嫌いなんだよ。日差しが。

しかしここでうだうだ文句を言っても仕方がない。カーテンを発売した偉大な誰かに感謝しよう。肌にも悪いという紫外線を含んだ日差しをカットするために、俺は椅子を寄せ、後ろで寝ている男を指

で突っついた。

「カーテン閉めてくれね？」

その男はすーすーと安らかに寝息を立てているだけで、全く起きる気配がない。そのまま永眠させてやろうか。折るぞ貴様。

いかん、頭がふらふらしてきた。目を細め、その忌まわしき太陽を睨み付ける。

おのれ、太陽の光さえなければ、怖いものなど何もないのに。

さて、起きているとどつかの火の竜を滅する魔法使いの様にふらふらになってしまうので、さらりとぶっちやけます。

俺、ゾンビっす。

ついでに魔装少女っす。

あ、あと、転生者というやつっす。

はい一世一代のカミングアウトでした。よし、俺も寝るぞ。死にそうだけど寝るぞ。このまま永眠しそうだけど。

ーーーあと誰かカーテンを閉めてくれマジで死にそうだ。

「親方あー！空から女の子が降ってきました！」「だあ
ああらっしああああ!!」

十九時十二分ぐらいだったと記憶している。

その日も俺は、学校で憎き太陽が去り行くまでケータイでゲームなどをしながらのんびりと過ごし、夜を待って高校を出た。なんで夜まで学校で遊んでいたかと疑問に思われるかもしれないが、しょうがないだろう？日差しの中を歩こうものなら、すぐさま地面地面に倒れまるでミイラのように干からびてしまいうだろう。

こう見えてゾンビなんだぞ？俺は。

学校から家までは歩いて五分というとても近い場所にある。もちろんこんな時間に帰るといふ奴はおらず、一人で暗いなかを一人で寂しく帰宅だ。

だが俺は家まで五分で帰れるはずだが、その日は何故か寄り道をしたくなった。

俺の家の近くには不吉なことに墓場がある。かなり大きな墓場で、ありふれた高校生ゾンビの俺は当然その場所が大好きなんだ。なんせゾンビは墓場から奇襲をかますって定番化のゾンビスポットだからな。

六月の下旬の暑い気温に逆らおうしているのか、ここに吹く風は山の気温より涼やかだ。そして星の見えない暗い空には、ぽつりと青白い月光だけが輝いている。

シヤリシヤリと心地のいい足音を鳴らして中ほどまで進み、俺は木に背中を預けた。さすがに墓石に座るなんていう死者への冒瀆行為はしない。死者への侮辱だからな。

月見気分で、買ってきたばかりのジュースを飲む。至福の瞬間だ。体の外と内両方に涼をとるこれが堪らなく気持ちいい。

寂しく見えるかもしれないが、これもある目的も兼ねてやっている。

さてそろそろ転生特典言っておこうか俺の転生特典は全部で三つ

全部ガチャで決まった。では紹介しておこうまず一つ目は……スマホだ。あ、お前らとんだハズレ引いたなと思っただろ？それがな充電要らずに防塵、防水などの故障を無し何処に居ても電波が繋がるといったステキ仕様。そしてこれが一番凄いなんと容量が無限で転生させた奴に毎日もとの世界の漫画や小説などが小分けされて届いているという太っ腹な特典だったんだ。

そうしているうちにテンションが上がったのだろう。俺は、飲み干したグレープジュースのペットボトルを空へ高く放り投げた。ペットボトルは粉粒に見えるほど天高く上がっていく。

いつ落ちてくるかを夜空を見ながら待っていると、何か別のものがピンク色にキラリと光る。

鳥？いやいや、鳥が落ちて来る筈がない。それにしてもでかい。しかも二つだ。どう見てもペットボトルには見えなかった。

俺はその場から離れた。といっても、慌てることと急ぐことは愚者のやることだ。冷静に軌道を見極め、衝撃が届かない安全地帯を割り出し。そこに移動する。

ドゴーン！とまるで小さな隕石が落ちた様な音がして、先ほどまでいた馬車に穴が開いた。

砂利だらけの地面を盛大に巻き上げ、砂塵と小石が墓石に降り注ぐ。なるほどこれが土砂降りか。

俺はその後降ってきたペットボトルをキャッチし、これを見れば何かが変わるそんな気がして、出来たばかりのクレーターに戻って来た。

「いたたたたたた〜」

同人誌即売会ぐらいでしか目にかからない魔法少女風のコスプレをした女の子が腰を押さえていた。身長は見た感じ百四十五と言ったところか。

その少女のしたでは、学ランを着たクマが女の子の下敷きになりぐったりとしている。ついでに俺の立っている横には、何故かチェーンソーが刺さっていた。

そのチェーンソーを手にとると、まるで大きさと質量がともなつて

無いかのように軽かった。俺がゾンビだから軽いと感じるのかも
れないが。

「……ってそんなことよりも。」

「おい」と、腰を押さえている少女に声掛けると栗のような色をした、触り心地の良さそうな肩までの髪を振り乱し、少女はこつちを睨み付けてくる。

猫のようにとても丸く、くりくりとしたとても印象的な瞳だった。その可愛らしい顔を慈しむように見ていたが、どうしても目は上に行ってしまう。

なぜなら、頭の上からピヨコンとどこかの騎士王より長く伸びる髪の毛は、俗にいう《アホ毛》と呼ばれる珍しい代物だからだ。

「おい。お前大丈夫か？」

「あー……っ！」

口を開けた少女が何やら俺を指差している。何を見つけたんだ？もしかして俺バレた？

「あたしの魔装錬器！返せ！早く！急げ！すぐさま刹那の内に早々に早々と即行で瞬く間に束の間に瞬時に一瞬でたちまち今すぐさつさとすぐさま返せっ！」

「ずしずしと力強く砂利を踏みながら、どんどん近づいてくる。」

「待て。待て待て待て！その魔装錬器っていうのはなんなんだよ？」

凄い剣幕で砂利の地面を踏みしめるたびにっぺんの《アホ毛》がゆらゆらと揺れる。それにしてもなんて格好だ。その見るからに恥ずかしいコスプレ衣装が、すーっと消えていき、見る見る白い肌が露わに……って、は!?

「あんたが持つてるそれだ！それがないとあたし、攻撃魔法がつかえないんだからな！」

俺は、すぐさま背を背けたが彼女は、自分の服が消えてしまっていることに気がつかないほど怒っているようだ。

「おい！無視すんなよな！」

「どうやら俺が背けたのが無視したのと感じたらしい。」

「おい。服！服！」

「ほえ？」

俺の言葉を頭で反復しているのだろうか。二秒ほど間を置いたあと、まるでトマトのように顔を真っ赤に染めた。

「うきやあああああ!!!」

なんか可愛らしい悲鳴を発したら大事な所をかくして下にしゃがんだ。

「こつち見んなっ！この変態っ！エロスペシャルがつ！」

「いやいや見てねえから。それよりもほら」

俺は上半身シャツ一枚になり自分のカッターシャツをその少女に渡した。

「あ、ありがとう…」

そう言い少女は近くの墓石の陰に隠れた。

「なあ、お前が言っている魔装錬器ってこれか？」

手に持っているチェーンソーを見せるた。

「当たり前だろ！」

そう言う到着てきたのだろう。墓石からシャツ一枚の少女が出てきた。

手を返せとばかりつきだしてくるので手に持っているチェーンソーを差し出すとバチツツと静電気のような火花を放ち、その白い手はチェーンソーに触れなかった。

「痛っ！なんで！」

何度も何度もチャレンジするが、俺が持つチェーンソーに触れられない。火花は飛び散るだけだった。強引につかみ取ろうとすると、すごい電撃にかわる。

そうしていると三メートルを越える大きさの学ランを着たクマがぐつと両膝を曲げ、砂利を巻き上げながら飛び上がったんだ。あの少女と共に落ちてきたもう一つの物体だ。その瞬間、俺は少女を抱き逃げた。

空高く舞い上がったクマが俺たちに飛び蹴りかまそうとするまで、わずか一秒もなかったと記憶している。見事な早業であった。

ーいやはや、ゾンビで良かった。普通の人では絶対に当たるから

ね。

振り返り、クマと対峙する。チェーンソーは少女を抱き上げる時に手を離してしまい、少し遠い位置に突き刺さっていた。

「お、おろせよなっ。」

「はいはい」

借りてきた猫状態の少女を下ろし後ろに隠れさせた。

「一応聞くんが、このクマはなんだ？」

クマはどこで覚えたのか、中国拳法のような構えをとっていた。

「そいつは凶悪女子高生クマツチだ！早く逃げろっ！じゃないと、あんなにかすぐに殺されてしまう！」

驚きの事実。なんとこのクマは女子高生らしい。学ラン着てるけど。………まあ、学生ではあるか。学ラン着ているぐらいだから譲るとして、

「凶悪そうには見えないんだが？」

目の前にいるクマはぬいぐるみのそれと同じく、つぶらな瞳をしている。毛並みも綺麗だし、可愛いぞ？動かなければ、高級なぬいぐるみと大差ないくらいに。

「ばかーほんとばかー！あんた相手の力量も測れないのか!？」

少女は「全く」と呆れた声で続けた。まあ、確かに体格差がありすぎるからな。

強そうに見えないぬいぐるみのような可愛らしい顔をしたクマが口を開く。そして、牙をむき月に向かってその口から大きな雄叫びを上げた。———野獣の叫び。

大気を震わせるその咆哮に、少女がビクリと体が強張らせていた。クマの口からは障気のような紫色の吐息が煙のように足に這い上がってくる。可愛いなんて言葉は合わなかったようだな。

俺は拳を軽く握り、力をこめた。

さて、そういうええあと二つ特典を言っただけだ。では、ついでに発表しといてやる。

俺の特典は《身体強化》と《身体操作》だ。

身体強化はみんな分かるだろう。自分の攻撃力やら防御力やらを

上げるやつだ。では身体操作とはなんだ？という質問が返ってくるだろう。身体操作とは、文字どおり自分の体を操作することだ。例えば

「骨圧縮、皮膚圧縮、筋肉圧縮準備」

足の中の筋肉が圧縮し骨の隙間を限界まで無くし極限まで足を硬くする。皆さん骨の中身はどこどころ隙間がありまるで軽石みたいな感じだどご存じだろうか。おれはそれを圧縮して骨自体を白亜の石みたいに硬くた。そして皮膚は、紙を暑くしすぎたら破れなくなるそれと同じように皮膚をの層を何層も作った。

戦闘体勢へ移ったのが分かったのだらうクマは大きく息を吸いながら腰を落とし、先ほどと同じく紫色の障気を一息で吐き出すと共に大地を蹴り、高速で距離を詰めてきた。俺はクマが地面を蹴るのと同じ時に蹴り、クマの回し蹴りを滑るようにかわし懐に入った。

「筋肉圧縮！」

足の全てが圧縮され今千切れやすい筋肉繊維は一本残らず凝縮し今俺の足は一本のめちやくちや硬い鉄柱と同じぐらい硬化された。

「オラァー！」

それはクマの膝へ寸分たがわず当たり足がちぎれクマは膝をついた。だが諦めてないのか方膝が無いまま腕むちやくちやに振り回し襲いかかってきた。

それを全てかわしてクマの頭を両手で持ち、首を回す。ゴギャツという鈍い音をたてた。クマの首は涎を夜空に飛ばしながら、高速回転してついに限界がきたのか頭がちぎれて地面にぼとりと落ちた。そのあと、胴体もズシンとおとを立てて倒れ込んだ。

人間は力を100%使えないって聞いたことないだろうか？

100%の力を出してしまうと体が耐えられなくなるので、脳が勝手をセーブするらしい。ほんとの危機が迫った時に、たまに使えない。火事場のバカ力というらしい。

で、俺は、耐えられるらしい。勝手に力をセーブして欲しいぐらいだ。100%どころかそれ以上だって出せるんだぜ。

だって俺ゾンビですから。

筋肉が悲鳴を上げようが、痛みなんて感じない。しかもゾンビになったことと特典のおかげでめちやくちや頑丈になっているし、一瞬で直っちゃう。まあ、力を出しすぎると骨が複雑骨折みたいにやばいことになるけどな。

「お前すごいB級メガロの凶悪悪魔男爵クマツチを倒すなんて……」

「まあ、首ちぎったら常識で考えて死ぬのがあたりあだけどな。」

シャツがつついっ引っ張られてなにかと振り向いたら顔を真っ赤にした少女が、うつむいていた。あと、アホ毛は何かの電波でも受信しているのか、やけにピコピコ揺れていた。

「あたしの魔装錬器、とって」

少し離れた場所にあるのだが、まだ触れないのだろう。俺が触っても電撃は来なかったので拾った。

「全くなんでこのあたしが、こいつに拒絶されなきゃなんないんだ。」

と、俺に聞かれても「さあ？」としかいえだろう。

「よし、ちよつとあんたん家連れてけ。電話しなくちやいけないから」
「電話？電話ならあるぞ」

ズボンのポケットからスマホを取り出す。さつきすごい動きをしたのに壊れないなんてさすが特典のスマホ。

「何よその魔道具……」

スマホを前に出すと警戒するように、一歩あとずさった。突き出すように前に出すと、避けるような動きを見せる。ちよつと猫っぽくて可愛い。

「ただの電話なんだが」

「ほんとにか？あたしを騙したら、そのクマツチみたいになるからな」

倒れていたクマを指差す。クマはキラキラと白い粒子のようなものに変わり、風に乗って粉々になり消えていった。……こうは、ないたくないね。

俺は「そんなことするわけないだろ」といい、電話の使い方の説明すると、「ふんふん」と以外にも素直に頷いて聞いてくれた。

ひとつとおり教え、渡すと百人一首の名人のような機敏さで電話を操作し、どこかに掛ける。

ブツブツブツブツブ………プルルルル、プルルルル、ブローー

「あ、大先生ですか？あたしです。リフレイン年ライジング組ハルナです！」

さつきから「この世界に人間は」などと言っているため、相手は恐らく別世界。電話つて、世界をこえるんだな。それにしても《リフレイン年ライジング組》つてそこはかたなく語呂が悪い。

「え？あ、まだ見つかってません………すみません。それよりもですね。実はミストルティンがあたしを拒絶するんです」

どうやらあのチェーンソーはミストルティンという大層な名前が付いているようだ。

たしかミストルティンつて神話の、えーと、ああ、そうだ宿り木だ。「え、はい。こう、ばちばちつと。あ、はい。魔力枯渇ですか。なるほどー……まさか！こんな世界の人間がそんな魔力持っている訳ないじゃないですか！」

お？何やら驚いている。そこらをウロウロとうろつきアゴに手をやり、考えている様子だ。

「なるほど。確かに、それしかないですね。わかりました。とりあえずこの世界で出来ることを先にやります。帰る手段は、またー……はい。すみません。お忙しいところをー……はい。ではまた」

といった感じに話は進んだようで、電話をきり「ん」つと突き出すように返した。

「あんだ、あたしの魔力奪っただろ」

じつと上目遣いで見つめられる。魔力？ファンタジーの定番のアレ？

「魔力つていうと魔法とかに使うあれか？」

「それだよーこの天才美少女悪魔男爵ハルナちゃんの魔力を魔力を根こそぎ持っていくなんで、ありえないくらいの魔力がないと出来ないうって大先生が言ってた！」

お前も悪魔男爵なのかよ。この子よつほど悪魔男爵が好きなんだな。魔力については俺はわからないが、それに詳しい人物を一人知っている。そいつは恐らく今、俺の家でのんびりとお笑い番組でも見ているだろう。

さて、どうする？俺がゾンビだなんて知ってるのは、俺と俺をゾンビにした奴だけだ。ま、この『天才美少女悪魔男爵ハルナちゃん』退屈な生活なら、言っつていいかもしれない。

「さつさと見え！あんた何者？まさか、この世界の魔法使い！あ、あたしを滅多刺しにするつもりだな！」

この世界の魔法使いは、どれだけ残酷なんだよ。

「俺はゾンビだ」

「ほえ？」

「死んでいるのに動いている死体。まあ、有り体にいうと死人だ」

「不死者！不死悪魔だん」「悪魔男爵ではない。間違いなく」

途中から台詞を被せた。何でもかんでも悪魔男爵にするな。

「そう……なるほど。死人なら剣で刺されてもー」

なぜそんなに剣で刺したがるのだろうか。まさか、こいつ俺が刺殺されたこと知っているのか？

最近、この街では連続猟奇殺人事件が起きている。俺もそれに巻き込まれ死んでしまい、まあ、今こうやってゾンビをさしてもらっている訳だが、俺はその犯人に剣で刺し殺されたんだ。事件のことを知っていたとしても、凶器が剣だとわかるだろうか？

もしや俺を殺したのはこいつでは……ないか。明らかに武器が違すぎる。

「ーーあんた、責任とってもらおうからな！」

「責任？」

「あたしの任務は、この腐った世界でアーティファクトを探し出すこととそれと、魔装少女としてこの世界に現れるメガロを倒すこと」

「あー、《魔法少女》ね。たしかに魔法少女なら魔法使うわな」

「はあつ？あたしは《魔装少女》だ！そんな陳腐なもんと一緒にすんな！」

違いがわからん

「そのメガロってのは、あのクマのことだよな？」

「そう。さっきの恐ろしい奴だ」

「なんであんなのと戦ってるんだ？」

俺じやなかったら普通死んでしまう相手だ。こんな可愛い子では命にかかわるだろ。

「メガロっていうのはな、あたしの世界を壊そうとする害虫だ。一匹残らず駆逐しないと、あたしら魔装少女に未来はない。つまり、あたしは戦士な訳。すごいっしょ！」

「なるほど確かにクマツチを見た感じ危険そうだな。でも魔装少女の世界を壊したいなら、なんでこの世界に現れるんだ？その話を聞いたかぎりだと普通魔装少女の世界に現れるよな」

「あたしたちの世界は空にあるんだ。メガロには空を飛べるやつは少ないからな。この世界を中間地点にしているんだ」

なるほど空にあるなら迂闊にも手を出せないからな。ここで鳥形とかが乗せて魔装少女の世界に侵入というわけだな。納得。

「とにかく、あたしは魔力をあんたに吸われて戦えなくなったからな。あんたがやってくれ！」

「は？」

「あたしも男が魔装少女になるっておかしいけど、あんたはこの天才魔装少女ハルナちゃんの魔力を吸ったんだ。だから現時点をもって魔装少女だっ」

びしっと細い人差し指をさされた。これは決定事項なのだろうか？

「待て待て。俺が？魔装少女？俺男なのにあんなふりふりした服を毎回着なきゃならないのか!？」

「知るかつ！しょうがないだろ！やれよなっ！」

えー、聞く耳無しかよ。さすがに刺激が欲しいからってあんな服は絶対に嫌だぞ。

「考え直せって。重要なことなんだろう？そんな簡単にー」

「その間……めっちゃ不本意だけど。あたし家帰れないから、あん

たん家に居候させてくれ……」

そううつむき、ごによごよとか細い声で言った。

まあ、こんな可愛い子が泊まるのは俺の刺激的な意味でも大歓迎だから。別にいいけど………

「じゃあ自己紹介しようか」

「ほえ？」

「俺の名前は相川歩。他のゾンビより一味違う力を持っている死人だ」

そう言うとハルナはニツと笑い口を開けた。

「あたしは天才美少女悪魔男爵ハルナちゃんだ！」

「よろしくな！アユム！」

『歩 だれ?』『あたしは天才美少女悪魔男爵ハルナ
ちやんだ!』

「おおっ!ここがアユムん家か!」

俺はハルナと一緒に帰り居間を案内させて部屋に戻り鞆をベッドに放り着替えて下に降りてきた。

「ハルナー。手は洗ったか」

降りくるとあらやだ修羅場。ハルナと家に住んでいるもう一人の少女がじとーと俺を見ていた

「アユム。こいつだれ?」

ハルナは頬杖をつきながらも一人の少女に指を指した。

あー家にはもう一人居候が居ること伝え忘れていたな。

「伝え忘れてたな。この子はユークリウッド・ヘルサイズ。俺をゾンビにしてくれた命の恩人で死霊使いネクロマンサーをやっている方だ」

紹介するとユークリウッド・ヘルサイズ、通称ユーはメモ帳を取りだしボールペンで文字を書いていた

『よろしく』

「ユーこっちは魔装少女をやっているハルナだ。よろしくやってくれ」

『わかった』

さて皆さんにはどうやってユーと会ったか説明する必要がある。

はじめて俺がユーとはじめて会ったのが一年前ちようど高校に入学してすぐのことだ。あのときはたしかゾンビになる前の日課の夜に自分が作った料理を持っていき公園で食べるのが趣味だった。

そこ、なんだその変な趣味っておもうなよ。一人寂しくテレビを見ながら毎日孤独に食べるのは俺の心が退屈&寂しいでなんかむなしくなってくるんだよ。

そして公園に行く途中にあるコンビニに飲み物を買に行ったら会ったんだ運命の人に。その人はどの銀色よりも綺麗な銀髪で目はサファイアよりも蒼く澄んだ目をしていた。

そして、その身に纏っている紫のドレスアーマーは少女をよりいっそう際立てさせまるで漫画かアニメから出てきたヒロインとかそういうオーラを醸し出していた

さながら儂い姫騎士ってところか。

くう…

「?なんだ?」

どこからか鳴き声が聞こえどっかに犬でもいるのかと見回したが何もいなく不思議に思っていると、少女がほんのり顔を朱に染めメモを見せてた。

『お腹すいた』

「ん、ああ君のお腹の声か。じゃあ」

そう言い晩飯が入った籠を見せると少女は目をキラキラして籠を食い入るように見た

「一緒に食べるか?」

そう言いと少女はこくりと頷き立ち上がった

「じゃあもう一本飲み物買わないとな。一緒に買おうかお金はこつちがもつから」

『いいの?』

「ああ。こんな綺麗な子に奢るなんて男冥利につきるからな」

一緒にコンビニに入りジュースを買いに飲料系が置いてあるコーナーまで来た。

「えーと。うん、普通にお茶にしよう。君はどうする?」

『私もそれで』

「あとなんか欲しい物あるか?」

『デザート』

「ん、アイスは食べている間に溶けてしまっそうだからゼリーな」
『わかった』

俺たちはコンビニを出て目的の公園に着いき

机に食べ物を広げてベンチに座った

「じゃあ、食べようか」

『うん』

「いただきます」

『いただきます』

二人同時にまずはおにぎりと手づかみでぱくり

『おいしい』

「だろ、コンビニのおにぎりの具材とかを参考にいろいろ作ってんだ」

少女はもくもくとおにぎりを食べる。

うん、なんかハムスターみたいでなんかもっと甘やかしたい感じの

可愛いさだな

「おかずもいろいろあるからな」

そう言い唐揚げやら豚キムチなどをすすめる

少女は豚キムチを箸でつかみ食べると口にあってぱくぱくと口に

次々と放り込んでいた

『素敵』

豚キムチは自信作だからな。口にあって良かった。

二人で晩飯をもくもくと食べることに数分

「ふう、食べた食べた」

『ごちそうさま』

綺麗さっぱり食べ終えた後食後のデザートを食べながらあること

を質問した

「なあ、なんで君みたいな綺麗な子が夜中に出歩いているだ？もしか

して家出とかか？」

『違う』

「じゃあどうして？」

『たぶん観光？』

「たぶんって…」

俺が頬をかきながら呆気に暮れていると少女はこくりと首を傾げ

ながら

「親は？」

『いない』

「どこかの孤児か？いやでも…」

『どうしたの？』

「いや、なんでもない。それよりも君は一人なのか？」
『うん』

ふむ、どうしようか。夜中にこんな綺麗な子が外に出歩いていたらサングラスとマスクをかぶった人かよく公園とかのすみにいる汚いおっさんが襲いかかってきそうだしな。

「泊まるあてあるのか」

『どうしてそんなことを聞くの？』

「どうしてって、そりゃあ君みたいな綺麗な子が夜を出歩いたら危険な目にあうからに決まってるだろう」

そう言ったらふいっと顔をそらされた。何故だ。

「で、あるのか？」

『ない』

「ふーん、じゃあ俺ん家来るか？」

そう言う少女は少し考えた後さらさらとメモをかき見せた

『大丈夫。ありがとう』

「いや大丈夫じゃねえって深夜には人さらいとかホームレスっていう強姦魔が徘徊しているんだから」

『それくらいなら大丈夫』

ええーこの子どんだけ自信あんだよ。もしかしてファンタジー的な感じの不思議ちゃんか？

と考えているとなんか砂場当たりに霧みたいなのが集まってきた。と思ったら霧から体が細く目のクマが目立つ男と

すらりとした張り付いた笑顔の二人組の男が現れた。

なんだこいつらどっから現れた。しかもなんか不気味な雰囲気だしてなんか整理的に気持ち悪い連中だな。

「ようやく見つけたあ頑張って追いかけた甲斐があつたよお」

「ふふ、そうだね。ようやくだ」

小さな声で言っているが身体強化のおかげで耳にその声が聞こえるがまるでムカデがたくさん入った壺のような気持ち悪さに言葉一つ一つがすごいぞぞわする。よくみたら少女の方も心なしか顔が青くなっている。

「なあ、こいつら君の知り合いか？」

『違う。私を執拗に追ってくるストーカー。他のやつらよりたちが悪い連中』

なにそれ、これと同じなのがまだいんの？気持ち悪ゴキブリかよ。
「さて君そこにいる少女を渡してはくれないかい？僕たちはその少女の知り合いでね。その子の父親に頼まれたんだ。捜してこいってね。」

俺に声が聞こえていないと思っっているのか張り付いた笑顔が特徴の男は嘘っぱちな言葉を並べ手を出した。早く渡せとばかりに。

「オラー！早く出せよ!!そのつはお前みたいな下等な猿が手え出していい存在じゃねえんだよ!!そいつはな俺みたいな至高の存在のもとにいるのがお似合いなんだよ!!!」

「こらこら」

「なんだ!!」

うわー、なんか二人の説明が噛み合っていないえ。そう思っていると男は急に目のクマが目立つ男の腕をもぎ取った。

「ギヤアアアアアアア!!!」

「おい、なにしてくれてんだよ。俺言ったよな？話合わせろってなに忘れててんだよ。ああ？お前まだ力関係分かってねえのかよ。もう一発やつとくか?」

腕をおさえ叫ぶ男に無表情で淡々とそれこそまるで感情のない機械もしくは石像のように言ったらこちらにむき話しかけてきた

「なあ君、悪いことはしないからさ。その子渡してくれない?」

その言葉を聞き少女は手をきゅつと握り顔をふるふると振っていた。

こりやガチでヤバイな。助けたいのはやまやまだが、いかんせん相手の方が実力があるしかもこの子の前では使えないし

ちらりと横を見たら少女がさながら故障した洗濯機のようにがたがたと震えながら涙はこぼさなかったがガチな目でこっちを見ていた。

え?この子あんなに大丈夫って言っていたよな?なんでこんなに

震えてんの？

「ああもうっ！」

立ち上がり少女をかばうように前に出て宣言する

「悪いな。この子はお前に用はないみたいだ。だからさっさとどっか行け」

「あれ？聞こえていなかったかな？この子の父親に返すために探していったって」

「ああ勿論聞こえていたさ。でも悪いな。俺の耳は他の人とは違ってめちやくちやいいんだ」

その男はぴたりと動きを止め三秒後頭をがしがしと掻いて静かな声で言った

「たく、とつとと渡せばいいものをどうして渡してくれないのかね？ま、渡したとしても証拠隠滅のため消えて貰うんだけどね」

そういう男は水を出しながら殺気を飛ばしてきた

「久々の刺激だな。やっぱりこの子は運命の人だな。俺にこんなにも素晴らしい刺激をくれるなんて」

「ああ？なに言ってるやがる」

その言葉に笑みを浮かべながら戦闘体勢に移った

「ようやくの刺激だ。楽しむか！」